

チャイルド・モーリス

- 1 チャイルド・モーリスは
静かな森で狩りをしていました
森の中にも森の外にも
ひとつこひとりいませんでした
- 2
・
・
・
・
・
・
銀のくしを取り出して
金の髪を梳すきました
- 3
いつでも素直につかえてくれる
小姓に声をかけました
「ジョン・スチュワードの奥様に
お話したいと頼んでおくれ
- 4
「
・
・
・
・
私にかわって
丁寧に伝えておくれ
- 5
「夜が来て
ナイトキャップをリボンで結ぶころ
華やかな町ロンドンに 商人たちが
行商に出かけるころ
- 6
「夜が来て
人々が思いをめぐらすころ
先生が学校で
ペンとインクで採点するころ
奥様が お望みならば
ふたりでお話いたしましょう
- 7
「奥様に緑のマントを贈りましょう
芝のように明るい緑のマント
静かな森に来るように頼んでおくれ
チャイルド・モーリスと狩りをしよう
- 8
「奥様に金の指輪を贈りましょう
高価な宝石いしがついた指輪を

ほかの人には知らせずに
静かな森に来るよう頼んでおくれ」

9 素直な小姓は 時には歩いて
時には走ってゆきました
ジョン・スチュワードの城に着くまでは
決して休みませんでした

10 育ちの良い 素直な小姓は
階段をかけあがり 部屋に着き
きれいな奥方様に会うと いいました
「主のご加護がありますように」

11 「チャイルド・モーリス様のおつかいです
お伝えすることがあるのです
モーリス様は 私がかわって
お伝えするようおっしゃいます

12 「夜が来て
ナイトキャップをリボンで結ぶころ
華やかな町ロンドンに 商人たちが
行商に出かけるころ

13 「人々が思いをめぐらすころ
先生が学校で
ペンとインクで採点するころ
ふたりでお話いたしましたようにと

14 「モーリス様からの 緑のマントの贈り物
芝のように明るい緑のマント
静かな森でいっしょに狩りをしようと
おっしゃいます

15 「モーリス様から 金の指輪の贈り物
高価な宝石いしがついた指輪
ほかの人には知らせずに
静かな森へいらしてください」

16 「おねがいだから
おねがいだから もう何もいわないで
主人の耳に入ったら
あなたはきつと縛り首」

17 ジョン・スチュワードは城壁の下で
一言漏らさず聞きました

.....

18 馬丁に声をかけました

「急いで馬の仕度をしろ」

執事にも声をかけました

「急いで着物の仕度をしろ」

19 馬に鞭をあてると

静かな森へゆきました

静かな森をあちこちと

くまなく探し回りました

20 ジョンは大きな岩に腰掛けた

チャイルド・モーリスを見つけてきました

銀のくしで

金の髪を梳すいておりました

21 チャイルド・モーリスは

立ち上がり 神に誓っていました

「あなたの奥様など知りません

会ったことはありません」

22 ジョンはいいました「これはこれは

どういうことだ

妻には 一度や二度ならず

愛のしるしを贈ったはずだ

23 「緑のマントを贈ったはずだ

芝のように明るい緑のマント

静かな森でいっしょに狩りをしようと

誘ったはずだ

24 「金の指輪を贈ったはずだ

高価な宝石いしがついた指輪

ほかの人には知らせずに

静かな森へ来るよう誘ったはずだ

25 「チャイルド・モーリス 忘れるな

どちらか一人が 死ぬだろう」
チャイルド・モーリスは いいました
「私は決して 死ぬものか」

26 あかく輝く剣を抜き
緑の草で拭きました
ジョンに激しく打ちかかり
少しも息をつきません

27 あかく輝く剣を抜き
ジョンは袖で拭きました
ジョンの激しい一撃は
モーリスの首を落としました

28 モーリスの頭を剣で刺し
うたって家路に着いたころ
美しい奥方は
すやすや眠っておりました

29 「モーリスの首は承知だろう
会ったことがあるはずだ
優しく抱いて 接吻するがいい
私より こやつのことを愛したのだから」

30 チャイルド・モーリスの首を見ると
奥方は これだけいって息絶えました
「産んだ子供は たったの一人
愛する我が子が 殺された」

31 ジョンはいいました「不自由もなく養った
私の家来は役立たず
私が怒りに狂ったときに
なぜ私を止めてはくれなかった

32 「騎士と呼ばれた者のうち
最も気高い騎士を殺してしまった
女と呼ばれた者のうち
最もきれいな女を殺してしまった」

(鎌田明子訳)